

第30回 北勢線の魅力を探る

藤原岳を望んで巡る里の春



藤原岳を望む



石神社



春日神社



猪毛利谷神社



桐林館



畑田井水



瀬木 次由井水
2017.8・絵文 丹後純子



紙芝居の上演/瀬木自治会館 佐藤儀左衛門の墓

藤原岳を眺めながら麗らかないなべの里を巡ります

開催日:2018年4月9日(日)

主催:北勢線の魅力を探る会

後援:桑名市、いなべ市、東員町、北勢線事業運営協議会、三岐鉄道株式会社

桑員まちのファンクラブ、都市環境デザイン会議中部ブロック

桑名歴史案内人の会、ふるさといなべ市の語り部の会

第30回北勢線の魅力を探る「藤原岳を望んで巡る里の春」

参加者 67人（内子ども1人）

協力 石川自治会・下野尻自治会・瀬木自治会・妙宗寺

ふるさといなべ市の語り部の会 樋口平和さん、山本たか代さん

阿下喜駅から藤原町 石川、石神社へ

伊藤 忠

天気予報は曇りでしたが開始前から小雨が降ったり、やんだり、傘がいるやら、要らないやら少し肌寒い中、会長の元気な挨拶で67名元気に出発しました。

日下病院、アイリス様のご厚意で駐車場を通させて頂き員弁川に沿って進みました。

藤原岳がはずかしいのか、雲で隠れたり顔を出すや不安定なお天気の中、員弁川にかかる前川橋に到着、全員の集合を待って江戸時代の川の流れ（員弁川、鎌田川の川替え）と現在の様子、井水の仕組みなど現場を見ながら、簡単な説明があり石神社に向かいました。神社では自治会長さん、説明役の伊藤一昭さんが迎えて下さいました。

「神社」の説明は一昭さん、「鹿(かご)の木」の説明は自治会長の伊藤正則さんにして頂きました。



代表挨拶



雲に隠れる藤原岳

<石神社縁起> 伊藤一昭

主祭神 品陀(ほんだ)和気(わけ)の命(みこと) (応神天皇) 他11祭神

創立は仁和(にんな)2年(886年)と伝わり延喜式内社であります。

主神事は大祭(元旦祭、春祭り、秋祭り、新嘗祭(にいなめさい)) 中祭(夏越しの祓い、年末の大祓い)をとり行っています。

*三重県の樹木100選に指定された幹の周りは4mばかりある巨木の「鹿(かご)の木」があります。

カゴは「鹿の子」の事で樹皮が丸いうす片で点々と」はげ落ち「鹿(か)の子模様」になる事から名が付けられました。又「火護の木」と書き社殿を火から護(まもる)るという、縁起か

ら植えられるようになりました。

奥殿の左右にはケヤキの巨木があります、幹回りが 4m20 cm もあります。



石神社



カゴノキ



伊藤一昭さん (左) と
自治会長 伊藤正則さん

昔からの言い伝えと現在

① 八天宮の縁起

この起こりは桑名藩主松平定重公の母親が夢のお告げで感(かん)得(とく)した神が「八天宮」です。歴代の領主が防火の神として領村にお触れを出して祭られたそうです。当地でも、毎月3日(現在では10日まで)朝の5時ごろから順番で(2戸)2人が石神社下の「湧き水池」から水を汲みお酒を入れて「八天宮」に供えて各戸の屋根に水打ちをしています。その時発する言葉が「八天宮さんのみずやでね」というように伝えられています。いずれにしても八天宮は「火の用心」の心掛けの神事です。

② 一日参りの行事

毎月一日に「宮守組当番」拝殿を開けて参拝者を迎えております、10年ほど前は当番が「赤飯」あずき入りの御飯を家庭で炊いて参拝者に振る舞っておりましたが廃止になりました。

③ 「石川のきちがい水」と言われる行事

12月年末当番者が員弁川で水浴をして身を清め奥殿の「ご神体」を目隠しをして清掃します。今では家庭で身を清めて「ご神体」の清掃に当たっています。ただ「ご神体」が何であるかははっきりとは伝わっていません。

④ 秋祭り「奉納子供相撲」行事

石川では江戸時代の末に地区四股名「庭の小桜」が出て、桑名相撲の力士になり地区の指導に当たっていました。明治5年には4本柱の許可を示す免許証もあったそうです。この事から石川の宮相撲は歴史も伝統もあり、今日(こんにち)の「子供相撲」の気風となって残っています。以前は「青年団」が夜「大人相撲」を奉納していました。

藤原山妙宗寺（ふじわらざんみょうしゅうじ）

市川 幹人

小雨降る中、石神社を後にした一行をお寺の方（先代住職の後継僧侶である長女様）が堂内に招き入れて下さった。ここでの解説は、ふるさといなべ市の語り部の会の会員で、浄土真宗本願寺派員弁組の門徒推進委員でもある樋口さんが行った。



妙宗寺



本堂で説明する樋口さん

当寺は浄土真宗本願寺派（通称・お西）に属する寺院で、文化8(1811)年、山城国愛宕郡六条境内町において創建された。六条境内町とは、現在で言う京都府京都市下京区西六条界隈であり、本山である龍谷山本願寺（通称・西本願寺）の門前町として、旅館、仏具店が立ち並び賑わったという。

開山一世は知元 [ちげん]、慶応年間(1865～1868)に製作されたとされる「京洛六条境内町殷賑図」（京都国立博物館蔵）という俯瞰屏風絵にその名が現れるとされるが(※)、生没年や経歴などは不明である。

明治14年頃、二世光淳 [こうじゅん] の代から、この下野尻の地に移転されたと伝わっているが、その経緯の詳しい記録は失われている。伝わっていることには、当寺移転前には下野尻地区に寺院は無く、各家は全て足下山明源寺（いなべ市藤原町東禅寺）の檀家であったという。そこで、住民達は自分達の地区にも寺院を持ちたいと熱望して土地建物を用意し、京都から当寺を移し、住職に光淳を迎えたということである。おそらく移転前の当寺は、一世知元没後に廃寺となっていたのだろうとのことである。

寺院というものは、全く新規に〇〇寺というように好き勝手に名前を付けて創建することは難しいようで、新しく寺院を建てたいと願う場合は、それまでにどこかで廃寺となっている寺院の跡を継ぎ、移転して再興させたという形をとることが多いようである。語り部樋口さんは、当寺以外の例えとして、藤原町石川の真城山妙福寺は、元々は説教所であった所に伊賀国上野向島（現・伊賀市上野向島）で廃寺となっていた寺号仏像を継いで寺院として昇格させたということや、員弁町下笠田の笠田山東光寺も、元々は滋賀県草津市にあったということを紹介された。

また、寺院の移転には都道府県への届出、認可が当時必要だったようで、当寺も明治15(1882)年3月20日付で三重県庁宛に移転届を申請し、同日受理されたと伝わる。ただし、本堂内にある「御本山志」と墨書きされた賽銭箱には、明治14年と書かれているので、県への届出前に移転は既に行われていたのだろうとのことである。

二世光淳を迎えて再興された当寺であったが、残念ながら光淳はほんの数年で亡くなってしまったという。この光淳についても詳しいことは伝わっておらず、ただ、跡を継ぐ子が居なかったため、梅戸井（現・大安町梅戸周辺の地域）から大塚信道〔しんどう〕が入山、三世となったと伝わる。

三世信道は立派な僧侶だったと伝わり、明源寺の過去帳から、当寺檀家の物故者を家単位でまとめながら全て書き写し、新たに当寺の過去帳を作成した。明治18年からは亡くなった方が順に記入されているので、信道の入山は明治18年以前ということがわかる。因みにこの信道の墨跡は、過去帳以外にも本堂入って右側奥の壁面に掲げた門徒の名前によって、現在も目にすることができる。信道にも子が無かったので、養女とその婿となる僧侶を迎えたのだが、その夫妻は朝鮮への布教活動に励んだ事もあり、住職として当寺を継ぐことは無かった。そのため、信道が亡くなった後2,3年間は住職不在となった。

四世藤嶽敬順〔きょうじゅん〕は、元は藤原町坂本の藤原山敬善寺（真宗大谷派、通称・お東）の次男であった。下野尻住民に無住となった当寺を何とか継いでもらいたいと、他派僧侶でありながらも請われて入山、転派して当寺を継がれたそうである。その後は、五世義豊〔ぎほう〕へと受け継がれている。

＝伽藍＝

<本堂>

明治13年に(※)四日市市（菰野町説も有）のある寺院の本堂を、員弁川、真名川と筏でさかのぼって移築させた。当時は真名川沿いに製紙工場があり、水運が発達していたからだろうとのことである。元々の建築時期は不明で、移築時点で相当に年数は経過していたであろうとしかわからない。尚、移築元の寺院というのは、昔は当寺門徒で「その寺を見に行った」という方も居てわかっていたそうだが、今では何という寺院なのかはわからない。

屋根瓦は光沢があり新しいように見えるが、昭和40年に葺き替えられたものである。雪の多い北陸地方の瓦の製法で作られており、丈夫で重く光沢があることが特性だそうである。

<庫裏>

三世信道が亡くなった頃に新築であったという庫裏は、平成10年に改築されて現在に至る。

<鐘楼>

明治25(1892)年建築である(※)。



鐘楼

<山門>

かつては木造の冠木門であったが、昭和41年9月に石造の門柱のみの形式に改められた。

<墓所>

本堂裏に信道以降の歴代住職とその親族の墓がある。

=寺宝・什物=

<本尊・木造阿弥陀如来立像>

本堂内中央に安置。見た目に古い仏像であるらしいことはわかるが、来歴は不明。当派末寺の本尊としては、やや大きめらしく、よく「こちらの御本尊はちょっと大きいね」と言われるそうである。

<旧本尊・木造阿弥陀如来立像>

文化8(1811)年10月、本山より授与。当山開山時から伝わる貴重な仏像であるが、現本尊と比較してやや小さいということから、現在は庫裏内、御内仏として仏壇中央に安置されている。現本尊への交代時期は不明である。

<親鸞聖人御影>

明治16(1883)年7月、本山より授与。本堂の内陣の右脇担（中央奥の間、本尊に向かって右側）に奉懸される。

<鏡如上人御影>

当派第22世法主。本堂の内陣の左脇担（中央奥の間、本尊に向かって左側）に奉懸される。

<蓮如上人御影>

明治23(1890)年12月、本山より授与。本堂右余間（右奥の間）に奉懸される。

<聖徳太子ならびに七高僧御影>

明治16(1883)年2月、本山より授与。本堂左余間（左奥の間）に奉懸される。

<賽銭箱>

本堂内の柱に掛けられている縦長の賽銭箱。正面に「御本山志」、右側面に「明治十四辛巳年孟春」と墨書きされる。

<和太鼓>

梵鐘が無い時代に代わりに打ち鳴らされていたという古い物で、現在は本堂内、向かって左手前の天井に吊るされている。

<喚鐘>

本堂正面、向かって右側軒下に掛けられる。かつては地域の火災を知らせる際に打ち鳴ら



上・本尊 下・旧本尊

されていたそうで、そのために本堂の側面ではなく、正面に掛けられているとのことである。古い物だと思っていたものの、調べたことはなかったということである。表面に掘られている文字は次の通りであった。

「明治十二年 卯八月吉日 伊勢國員辨郡 下野尻村」

「什物 寄付人 宮木長右ヱ門 宮木忠兵ヱ 川杵藤八」

(ここから削って消そうとした跡が有り)

「宝曆拾貳年壬午天 七月五日」

「勢州鈴鹿郡平田村 西光寺 惠教代 常什物」

(ここまで削って消そうとした跡が有り)

「同國朝明郡田光住 冶工 天明五郎左ヱ門 藤原國賀」



以上から、当寺で時代が判明している物の中で最古の物であり、今は廃れてしまったという現・菰野町田光の鋳物師による作であるということがわかった。また、消しきれなかった部分からは、元は「旧鈴鹿郡平田村西光寺」にて使用されていたことがわかった。現在でも旧平田村域内で西光寺という寺号を持つ寺院は一箇寺在る(鈴鹿市平田本町に在る真宗高田派の牧田山西光寺)が、当寺との関わりは不明である。ちなみにこの喚鐘は、後述する梵鐘に比べて音色が良いという。

<梵鐘>

現在の梵鐘は戦後鋳造されたもので、元々の梵鐘は太平洋戦争時の金属供出で失われたという。喚鐘同様、火災時に打ち鳴らされていたそうだが、この梵鐘は特に下野尻地域内の火災の際に鳴らされ区別されていた。

「三重県員辨郡東藤原 藤原山 妙宗寺 昭和廿四年二月」

「桑名市相川町 岡合金 鋳造所 鋳造師 加藤竹次郎」

語り部樋口さんからは当寺の解説の後、この地域の寺院の分布状況、寺院数などの説明があった。員弁川右岸は本願寺派(西)が多く、左岸には大谷派(東)が多いということを地図にてとてもわかり易く示された。実際に、左岸である旧員弁町内に本願寺派の寺院は全く存在せず、右岸である旧大安町内に大谷派の寺院は一箇寺のみという。また、いなべ市発足の旧4町史によると84寺院あったのだが、近年でもいくつか廃寺になっており、その数は減っているという。

最後に樋口さんがまとめられたという浄土真宗本願寺派員弁組の寺院巡礼のガイドブックの紹介(普段1冊500円のところを今日は特別に2冊で1,000円、一同笑い)をされて、解説を終えられた。

その後、先代娘様からも一言頂き、「この寺は歴史は浅いが、住民の皆さんの『この地に寺を』という熱意によって建てられた寺です」とまとめて下さった。さらに、「由緒書のような皆さんにお配りする物がないから代わりに」と、全員に散華を授与して下さった。雨が

降ったり止んだりするぐずついた天気の中、娘様に見送って頂きながら一行は次の目的地、春日神社へと向かった。

尚、本稿執筆にあたっては、妙宗寺先代住職奥様、娘様に多大なご協力を頂きましたことを深くお礼申し上げます。

<参考文献>

藤原町町史編纂委員会編『藤原町史』藤原町（1992）（※印と寺宝御影類の来歴）

春日神社

伊藤 忠

妙宗寺さんを出た一行は右側に明治、大正時代にたくさんのお弟子さんを育てられた工匠、棟梁の森伊作さんの弟子 15 名で建てられた記念碑がありました。

真名川の橋をわたりすぐ春日神社に到着、神社では案内役の前自治会長の藤田さんがお待ちでした。社務所に年代別に獅子頭が並べてあり、「狐面」や「天狗面」他の面も準備して頂き早い時間からご用意頂きまして有難う御座いました。そのうえ、ご丁寧な説明をして頂きまして全員が聞き惚れました。



<藤原町下野尻区にある春日神社について 藤田 進>

【由来・伝説】

古書に「現今社境内に一霊石あり、毎夜光輝きを発せり 村民之を尊崇し 是を礼し 遂に社を建て 石神社を祀る 故に村名を志礼石と云ふ」とあり、石を神様として信仰した。かつては石神社と称していたが、昭和 29 年社殿改築の際、村人が古くから春日様とか石原（いばら）の宮と親しまれたことから春日神社と改称した。この霊石は、130 年前に道路拡幅の際に移動し、所在は不明である。

当神社は、医薬の神である少名毘古那命（スクナビコナノミコト）を主神として山の神の大山祇命（オオヤマズミノミコト）外五柱・寿命の神の磐長姫命（イワナガヒメノミコト）外四柱の十二の神を奉斎する。

往古は、藤原岳の中腹に燈明の壁と称える土地があり、春日野袴腰（現地は太平洋セメント採石地）に藤原小黑麿と言う人が創立する。春日野は雪が多く参拝に難渋するため現在の地に移設された。



春日神社



説明する藤田さん

<春日神社神殿下出土の鏡について>

昭和 29 年神殿造営のため村人が旧本殿の下を約 3 尺(90 cm)掘ったところ鏡が出土した。鏡はツルハシで 4 片となり、一部分欠けて出土する。鈕（ちゅう）一つまみを中心に相似形となり、2 匹の鳥と草花を配したもので通常は「瑞花(ずいか)双鸞(そうらん)八稜鏡(はちりょうきょう)」と呼ばれるものである。この鏡は、形・文様から平安時代の末、藤原時代(850 年前)に作られたと推定できる。石神社造営の地鎮祭で、本殿中央部の真下に「鎮物(しずめもの)」として埋めたとされる。延喜式の「神名帳」に本社の名前が記されていることから、この鏡の出土から推定すると、石神社は 1000 年以上前に野尻に住んでいた人々の変わることのない崇敬を受けていたと思われる。

この鏡は、宝物として「さつき」と称する「ツヅミ」の洞、「オキナ」「ハンニヤ」の古代面、鈴舞の鈴の足と共に神殿に奉祀されている。



拝殿



校倉造の

畑田井水（はただいすい）の話

西羽 晃

2時間余り歩き続けて疲れて来たし、お腹も空いてきたところに、瀬木自治会館に到着した。広間に座り込んで早速に井後純子さん手作りの紙芝居を見せてもらう。「畑を田に」畑田井水の物語である。瀬木は田が少なく畑の多い地区だった。それにもかかわらず年貢は過大で、村民は苦しい生活であった。庄屋の佐藤儀左衛門秀継は畑を田に替えるには用水が必要と考えて、員弁川から取水することを桑名藩に願い出た。成功しなければ打ち首だと藩から申し渡されて、水路を開く工事を始めた。山や谷を穿つ難工事であった。村民は力を合わせてやっと水路は出来たが、川底よりも水路が高くて水が流れなかった。そのため100間（約180m）上流に取り入れ口を替えて完成した。完成して間もなくの享保19（1734）年4月27日に儀左衛門は享年60歳で逝去したので、水路を見下ろせる山中に彼の墓を村民たちが建てた。

紙芝居を見てから各自持参の弁当を食べた後に、畑田井水をたどりながら、小山を上って儀左衛門の墓（釈教清）に手を合わせて、次の目的地である猪毛利神社へ向かった。



瀬木自治会館



畑田井水の紙芝居をする井後さん



紙芝居に聞き入る参加者



畑田井水



佐藤儀左衛門の墓

猪毛利谷神社（いもりたにじんじゃ）

西村 健二

今回の北勢線の魅力を探る会も終盤となり、員弁川の支流である鎌田川にかかる鎌田橋脇の猪毛利谷神社へ到着しました。神社では佐藤俊介さんに川との闘いの歩みを中心に解説していただきました。鎌田川はここから 500m 程下流で員弁川と合流します。慶安 3 年（1650、庚寅）9 月 3 日から 9 日までの長雨によって洪水、いわゆる「寅の大水」が発生し、瀬木村は以後も度々水害に見舞われました。そのため、貞享 2 年（1685）に鎌田川、元禄年間（1688～1704）に員弁川の川替（流路変更）工事が行われ、現在の大きな弧を描く流れとなりました。



猪毛利谷神社



拝殿



説明する佐藤俊介さん

<縁起>

いなべ市北勢町瀬木字宮西、通称「いもり谷」に鎮座する神社で、素盞鳴尊・伊香我色男命・大山祇神・火産霊神・天白羽神・伊邪那美命・建御名方神・宇迦之御魂神の 8 柱を祀ります。創祀は不明ですが、明治 3 年（1870）12 月の瀬木村庄屋佐藤甚蔵の記録によれば、鎮座地は猪名部神社の跡地とされます。ある時、猪名部神社が川に流されて「いもり谷」に流れ着き、その地に牛頭天王社を建立して瀬木村の氏神としたといえます。また、旧社は藤井権現社、藤王大明神とも伝わり、諸説があるようです。文政 7 年（1824）の「村明細帳」に「牛頭天王」として記録に表れ、明治 4 年（1871）7 月には「猪毛利谷神社」として村社に列したようです。明治 40 年（1907）12 月 20 日に村内の天白社、山神社、八神社（走井社）、熊野神社を合祀しました。

<境内散歩 ～参道～>

鎌田橋脇の参道入口では昭和 12 年（1937）6 月 30 日に建立された大きな社号碑（佐藤佐五郎寄進、石匠藤谷政之助）が参詣者を迎えます。書は津の書家市川進（号塔南）が 84 歳の時の作品です。階段を上るとすぐに大きな石鳥居をくぐります。これも同日に佐藤佐五郎が寄進したもので、石匠も同じく阿下喜の藤谷政之助です。

参道を進むと最初に目にするのが幟台です。昭和 48 年（1973）10 月 7 日に安田喜博・佐藤文雄・佐藤隆男・佐藤英明が寄進し、昭和ポール製の幟用アルミポールは氏子の他に三

岐通運株式会社、株式会社京ヶ野ゴルフ倶楽部、昭栄館といった多くの地元企業からの寄付金によって購入されました。昭和ポール株式会社は昭和 38 年（1963）に設立され、平成 25 年（2013）1 月に大阪府大阪市阿倍野区に本社を置く昭和電工アルミ販売株式会社に合併されたことで姿を消しました。幟台脇の参道南北には円柱状の石を鉄鎖でつないだ特徴的な玉垣がみられ、石柱は南側に 8 基、北側に 50 基が並んでいます。

続いて大正 9 年（1920）7 月に建てられた 2 基の石灯籠、大正 10 年（1921）7 月に建てられた石鳥居が並んでおり、いずれも氏子中によって建立されました。その脇には昭和 9 年（1934）1 月に「本団記念事業」として「瀬木支部」によって建立された国旗掲揚台が立ち、「皇太子殿下（現在の今上天皇）御降誕記念」と刻まれています。昭和天皇の皇長子として誕生した明仁親王の祝賀事業の一環として建立したようです。

提灯台に続いて昭和 12 年（1937）6 月 30 日に佐藤佐五郎によって建立された 2 基の狛犬があります。その奥の石鳥居が境内で最も古い石造物で文政 11 年（1828）8 月に江戸通油町の伊勢屋吉兵衛が寄進したもので、佐藤平三郎によって修復されています。鳥居には石製の社号扁額が掲げられています。

<境内散歩 ～本殿・拝殿の周辺～>

拝殿北側には社務所があり、踏台は昭和 48 年（1973）10 月 7 日に佐藤隆男が寄進しました。その傍らには立ったまま使用できる手水石（昭和 48 年 10 月、佐藤隆男寄進）があり、台座には「大典記念」と刻まれており、佐藤幸太郎が寄進しています。恐らくは大正 4 年（1915）11 月 10 日の大正天皇の即位礼に合わせて作られたもので、手水石とは時代が異なります。社務所の裏側には火除けのために「水」と陽刻した鬼瓦が置かれていました。

拝殿の南側には御輿庫があり、その前に置かれた手水石には「奉献 寄附人佐藤清右衛門文政十二年（1829）十月日」と刻まれています。文政 11 年（1828）8 月の石鳥居の翌年に寄贈したことが分かります。拝殿前の賽銭箱は平成 4 年（1992）6 月に佐藤英明の寄進によるものです。また、御輿庫の裏には多くの五輪塔が並んでいます。

本殿前には大正 4 年（1915）11 月に「大典記念」として佐藤寛次郎・佐藤佐五郎・佐藤鹿蔵・佐藤丈太郎によって寄進された 4 基の石灯籠、佐藤平兵衛・佐藤栄治郎・佐藤平左衛門（勲七等）・佐藤逸太郎によって寄進された 2 基の狛犬、昭和 48 年（1973）10 月に川瀬一之助・佐藤憲三によって寄進された 2 基の石灯籠が並びます。なお、本殿玉垣外の南側には「天皇陛下御即位二十年」を記念して神宮杉が植樹されています。

<境内散歩 ～二等水準点～>

幟台の南側には昭和 53 年（1978）10 月に設置された二等水準点（10192 号）があります。水準点には等級があり、国（国土交通省国土地理院）が行う基本測量に用いるものは基準・一等・二等・三等の 4 種類があり、地方公共団体が行う公共測量に用いるものは級を使用します。水準点は標高を図ることに用いられ、東京都千代田区永田町に所在する憲政記念館の敷地内に設けられた日本水準原点を基準として各地の標高を求めます。よく似た言葉に

海拔がありますが、海拔は東京湾の平均海面を基準としていますが、日本水準原点自体も東京湾の平均海面からの高さを元に測定しているため、定義は異なっても結果として同じ意味の言葉ということになります。ただし、日本水準原点の標高は関東大震災と東日本大震災で二度の改定がなされています。

桐林館（とうりんかん）

集山 一廣

猪毛利谷神社から県道 5 号線を阿下喜に向かって約 1.5 km 歩き、最終目的地の桐林館に到着した。

桐林館は昭和 12 年 3 月に阿下喜尋常小学校校舎として建設された。建築当初は南北に 3 列の校舎が並んでいて、東と西と中央を南北に渡り廊下でつながっていた。その後、昭和 56 年に鳥坂野に新校舎が完成し、阿下喜小学校が移転するに伴い従来の校舎が取り壊される予定だったが、建物保存の要望を受け、一棟を規模縮小し同校地北側に移築保存され、昭和 58 年 2 月、文化資料保存施設「桐林館」として開館した。

開館当初はこの地方で出土した土器類、戦前の教科書や生物・鉱物の標本、生活道具等を展示していた。平成 26 年、桐林館はいなべ市で初めての国登録有形文化財（建築物）となった。



桐林館



教室での事業風景



卒業生寄贈の時計

校舎屋根には青色の瓦が葺かれ、屋根中央に小塔を設け、屋根の左右には換気窓（ドーマー）が付けられている。正面玄関にはポーチを設け、昭和前期の地方小学校の様式傾向をよく表している。現在保存されている 4 室は小学校当時の校長室、特別教室、職員室、準備室として使用されていたものだ。その中でも校長室と職員室の天井は井桁に格子を組む格天井が設けられ、他の教室とは違った意匠を凝らしている。

国登録文化財となった折に、小学校として使用されていた昭和 39 年頃の普通教室と校長室をともに復元し、当時の様子そのままを展示している。普通教室の机・椅子については現

在の阿下喜小学校に保存されていたものを基に形状・材質を忠実に再現している。当時の置き傘（番傘）は教室内の壁に掛けて保管する設えになっているのが面白い。

今回、この普通教室の椅子に小学生の頃を想いうかべて座り、阿下喜小学校で教鞭をとられていた井後純子さんの思い出話を拝聴した。

教壇の横に置かれてあった小学校の校章は五三桐の紋をモチーフに中央部に阿下喜のイニシャル「A」があしらわれ、とてもモダンなデザインに感心した。

桐林館の名前の由来について、校舎建設当初の阿下喜小学校校庭にはたくさんの桐の木が植えられていて、「桐林館」の名はその当時の様子から命名されたという。



校章の桐の紋



阿下喜美術館



二宮金次郎像

職員室はアート&カフェで活用し、「桐林館阿下喜美術室」として 2017 年 7 月 7 日より作品の展示と、カフェを営業している。美味しい珈琲といなべのスイーツが評判となっている。

校長室は昭和の小学校の趣を残す立田小学校校長室の備品をそのまま移設している。立田小学校はいなべ市古田に所在していたが、平成 29 年 4 月の藤原小学校への統合をもって閉校となった。

正面玄関の東に二宮金次郎像がある。これは、東藤原小学校（いなべ市藤原町東禅寺所在、平成 29 年 4 月閉校）に建てられていた石像を移設したものだ。

旧阿下喜小学校校地の南辺には、校地と道路区画に石造りの門と石柵がある。これらは大正 9 年から大正 15 年にかけて阿下喜尋常小学校の前身建物や役場の門及び石柵として整備されたものだ。尋常小学校開校時の面影を伝えていて、桐林館とともに平成 26 年、国登録有形文化財（建造物）いなべ市第 2 号に登録された。

今回のコースは桐林館までで、ここで解散。出発からずっと傘が手放せない小雨に見舞われたが、何事もなく無事に終えたことを感謝するとともに、今後の会運営の方針を話し合うため、かつて旅館であった古民家を利用した上木食堂に向かった。

第30回北勢線の魅力を探る 報告書
「藤原岳を望んで巡る里の春」

編集・発行：北勢線の魅力を探る会

代表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉732

TEL 080-3073-3313

E-mail j-kondo@cty-net.ne.jp

発行日：2018年5月22日

本報告書の著作権は上記発行者に帰属しています。
ご利用の際はご一報ください。

ブログ：<http://blog.canpan.info/hokuseisenn/>